

はじめに

「水滸伝」<sup>すいげん</sup>。中国四大奇書の一つであるこの物語は、中高年の方々には比較的なじみがあるものと思います。今から四十数年前には、一時的にブームになったこともあります。漫画、テレビドラマと大人達だけでなく、子供達にまで知られていました。ですが、今ではすっかり「三国志」に押され、わずかにゲームの中にその名が残っている程度です。

若い方の中には、「水滸伝」の英雄豪傑が集う「梁山泊」<sup>りやうざんぱく</sup>という場所の名を知っていても、そのもととなる「水滸伝」は知らない。そういう方がほとんどだと思います。「三国志」の孔明、劉備、関羽、張飛は知っていても「水滸伝」の黒旋風李逵、豹子頭林冲、花和尚魯智深は知らない。まことに残念なことです。

「水滸伝」を復権させたい。その思いが日に日に募ってきました。そんな時、北方謙三先生の「水滸伝」が刊行されました。原典の「水滸伝」を大胆に再構築し、登場人物もようやく現代に通用するものに变革されていきました。まさに目から鱗が落ちる、でした。これまで、古典というものは改変できないものだときらめていた私にとって、それはまさに青天の霹靂でした。いいんだ、変えても。やったね。そう舞い上がりました。同時に、これまで漠然といただいていた「水滸伝」という物語への不満。たとえば、義賊として梁山泊に集まったあと、招安を受けて、これまで抵抗していた宋という国の使い走りになってしまう。主人公たるべき宋江の変節、殺人狂としか思えない登場人物。あまりに出番の少ない女性キャラ。それら様々な不満が一気に押し寄せてきました。

そうだ。いつか自分の「水滸伝」を書いてみよう。そう思い立ちました。北方「水滸伝」は完成されています。現在は「楊令伝」として書き続けておられます。北方先生の傑作はそれでいい。でも自分の「水滸伝」もこの世に伝えたい。そう思って、二年をかけて宋代の歴史を

勉強しました。そして物語を紡ぎ出す。それが五十歳になった時でした。「水滸伝」での星の生まれ変わり、百八人の仲間の人生を生み出すには、やはりそれ相応の年齢にならなければできなかったということです。

物語を書くにあたり、できるだけルビをふることにしました。中国名が読みにくく憶えにくいということもありますが、できれば若い方、中高生にも是非読んでもらいたい。そう思ったからです。実際、一読者から見ますと、名前など、一度しかルビをふっていないと、ああこれは何と読むんだっけ、と前のページに戻ってわざわざわしい思いするということがよくあります。それで、知識のある方には目障りかもしませんが、できるだけルビをふることにしました。名前など、繰り返しルビをふることにしました。他には、あまり歴史を前面に出さない。どうしても必要などころはありますが、物語の興をそがないように注意しました。日本とは習慣の違うところも、許される範囲で日本風に行っているところがあります。特に、挨拶のところです。抱拳や拝礼といった、あまりなじみのないものはどうしても必要な場面以外は、頭を下げるなどの日本的なものにしています。

ただ、これまでの「水滸伝」では、武器に関してかなりいい加減なところがありました。

たとえば青龍円月刀。「三国志」の関羽が有名ですが、これの登場は三国時代よりもっとあとと考えられています。そうしたことにもできるだけ配慮しました。それに戦闘シーン、特に個人対個人の闘いでは、ある程度中国風を意識しました。金庸の武侠小说です。日本の剣豪小説のように、見合っただけで決着がつくなどということは中国では考えられません。カンフー映画は別にしても、日本の武道家と中国の武術家とでは、空手と拳法ほどの差があると思います。空手は一撃必殺。それに対して、拳法は手数で相手の動きを封じて倒す。そうした違いはあきらかにあると思います。ですから、日本の剣豪小説のようなスタイルはとりませんでした。ただ、気功はとり入れていません。現在でも、中国武術と気功は分かちがたいものだからです。日本

では武道、中国では武術。この差は小さなものではない。そう思いま  
す。

私の「水滸伝」では、主人公を三人の娘に設定しました。それぞれ  
個性の違う幼なじみ。その三人が、星の名を冠した仲間達とともに、  
民のための国を創ることを夢見て戦い抜く。

それが主題です。原典の「水滸伝」の最大の欠点、女性が全く活躍  
しない。それを徹底的にあらためました。それとともに、原点では言  
及されず、日本ではあまり取り上げられない俠、または侠にも書き及  
んでいます。なぜなら、中国の歴史を通じて、俠の存在は無視できな  
いものだからです。俠は、ある種の自警団、懲罰組織とも考えられま  
す。その社会を江湖と呼びます。「水滸伝」でいう好漢。これはまさ  
しく俠のことです。貧しく力のない庶民が、法から逃れ、あるいは法  
の及ばない者を裁く組織。民の自衛組織ととらえることもできます。  
その中で、武術を修練した者が武俠です。宋という時代は、徹底的に  
武が弾圧された時代です。そのため、武術集団である社は嚴重な取り  
締まりを受けました。ですから、武俠はどうしても地下に潜らざるを  
えません。それで俠の結束が叫ばれた。そういう時代でした。

なお、当初は第一部第一章政和三年春だけ、一ページ千二百字とし  
ておりました。この章だけ長いからです。というのも、はじめはこれ  
だけで終える予定だったのです。しかし現在は他の章と同様、読みや  
すいように一ページ八百字にしています。今では原稿用紙換算で一万  
枚を超える長さになってしまいました。まだ終わってはいません。た  
だ、ここらで一度ホームページを作っておくか。そう思っただけで立上げ  
ました。中国ものですので、名前になじみがなく、読みはじめは苦し  
いかと思います。ですが、第一部を読み終えた頃にはこの物語の面白  
さを分かっていただけると信じています。

登場人物の名前以外はすべて新しい「水滸伝」。この「新水滸伝」  
をどうぞお楽しみください。